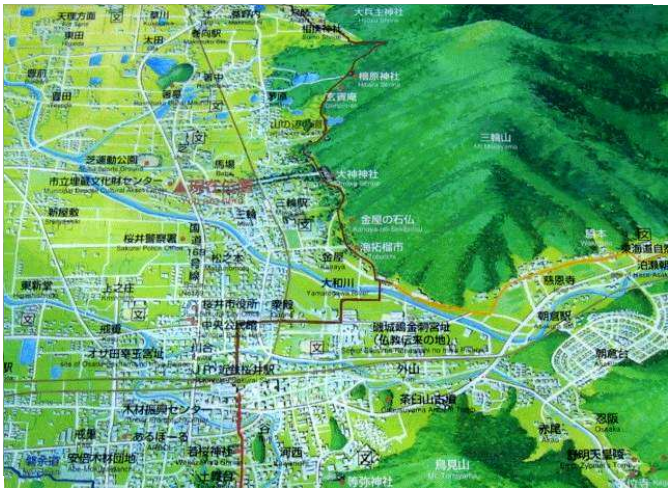
8.

古代　初期大和政権(三輪王権)が王城の地に求めた産鉄の地

鉄のやま「三輪山」とその山麓を縫う山辺の道

大和盆地を大阪に流れ下る大和川(初瀬川)が青垣・吉野の峰々が連なる東の壁から大和盆地に流れ出る所に秀麗なピラミッド型の三輪山がそびえている。この奈良県桜井市「三輪山」の麓は古代日本誕生の黎明の時代「やまと」の枕詞「しきしま」と呼ばれた王城の地。４世紀三輪王権と呼ばれる初期大和政権成立の舞台。ここで大和朝廷の基礎が養われたという。



また、北に伸びる三輪山山麓には３世紀に遡れる巻向地区には纏向古墳群があり、邪馬台国畿内説を唱える人はこのこの三輪山北山麓の地が卑弥呼　邪馬台国の地という。

この山裾を縫って明日香から北へ古代の道　山辺の道が王城の地を貫き、麓にはこの三輪山をご神体とし、出雲の神「大物主命」を祭神とする日本最古の神社大神神社がある。

鉄との深い関連が考えられる神社で、産鉄地・産鉄の民と関係の深い地と見られ、今もその山麓には金屋・穴師・金刺などの産鉄地名が残り、南麓の金屋からは鉄滓が出るとの文献もある。

そう考えるとこの三輪山山麓は古代の重要な産鉄地で三輪山は鉄の山ではなかったか・・・。この地を得た人たちが、この三輪山の鉄および鉄の技術を背景にこの地を本拠として、日本誕生がなしとげられたのではないか・・・・・・おぼろげに三輪山は古代の産鉄地と思っていましたが、もっと強く　三輪山の鉄が直接に日本誕生に重要な役割を演じたのではないか。。。。と思えてくる。

ちょうど　畿内の製鉄遺跡を歩こうと思っていた矢先である。また、大神神社の神域　三輪山へは届を出せば登拝出来るという。

三輪山へ行けば、何か鉄の痕跡が見つかるかも・・・・そんな期待をもって出かけました。
期待にたがわず　三輪山は今も砂鉄が見られる鉄の山
また、この王城の地は時代を越えて脈々と鉄の系譜と共に続いていると思えてくる。
また、大神神社の巨大な大鳥居は現代の鉄のモニュメント。これから１３００年も三輪山の前に立って王城の地　やまとを見据え続けるという。もうビックリ・・・・・・。
古代　畿内には三輪山・石上と同時に河内にも大きな鍛冶工房。それが三輪王朝に続く河内の王権へ・・・そして北近江・越の鉄をバックに畿内へ入った継体天皇の誕生へ。
畿内の「鉄」が面白くなってきた一日でした。

内　　容

古代　初期大和政権(三輪王権)が王城の地に求めた産鉄の地

産鉄の地「三輪山」とその山麓を縫う山辺の道

1.　産鉄の地「三輪山」とその山麓を縫う山辺の道　Walk
   1. 産鉄地名の桜井市金屋集落 そこは古代王城の地「しきしま」
   2. 三輪山をご神体とする日本最古の神社　大神神社
   3. 三輪山　登拝　　三輪山に鉄の痕跡を探して
   4. 卑弥呼の地　箸墓界隈　三輪山麓の丘より夕日の大和盆地を眺め

2.『 古代の鉄の山「三輪山」と初期大和政権 』　思いつくままに
   1. 三輪山は古代鉄支配のシンボルでなかったか・・・・
   2. 三輪山　大神神社　三輪山山麓は産鉄の地
   3. 鉄をめぐる朝鮮半島諸国と日本の関係
   4. 邪馬台国大和説と三輪山山麓　山辺の道

三輪山山麓山辺の道からの大和眺望
【（左）大和三山　　（右）箸墓古墳を中心とした纏向古墳群　】

1.　産鉄の地「三輪山」と山麓を縫う山辺の道　Walk

3月２３日の朝　難波から近鉄に飛び乗り、桜井へ久しぶりの大和である。
古代産鉄のシンボル三輪山とその周辺に鉄の痕跡を訪ねるのが今日の目的。
知らなかったのですが、三輪山へも神社で届を出せば登拝出来ると聞き、飛び出してきました。
気楽な風来坊の Walk である。

大和盆地を経て大阪に流れ下る大和川(初瀬川)が青垣・吉野の峰々の連なる東の壁から大和盆地に流れでる所に秀麗なピラミッド型の三輪山がそびえる。
この三輪山山麓の地が桜井　古代初期大和政権の中心地である。

三輪山から流れ出る狭井川で見つけた
砂鉄の堆積ときらきら光る雲母

三輪山山麓には産鉄と関係する大国主命を祭る日本最古の神社　大神神社　そして地図には金屋・穴師の地名が残り、其処は初期大和政権の遺跡が残る初期大和政権の中心地。また、大和川の岸は都の外港で難波津から大和川を遡る舟運の最終地として栄えた「海拓榴市」。和鉄・鍛冶の技術をも含め、大陸からの新しい文化が渡来人と共に真っ先に伝来する地でもある。確証はないが、和鉄と深いかかわりを持つと考える。

生駒山山麓を通って　二上山が見え出すと西に葛城・金剛山　東から南へ青垣・吉野の山に隔てられた広大な大和平野。大和三山を眺めながらその中をまっすぐ東に突ききり、東の山々が近づくと桜井。大阪難波から約４５分足らずである。

駅前の広場に歴史街道「山辺の道」の標識。今日は一日三輪山山麓の山辺の道を歩く。
東の方向に市街地の家並みの直ぐ向こうに三輪山に連なる山々が見え、そっちへ歩き出す。

桜井駅周辺　桜井は吉野杉の集散地

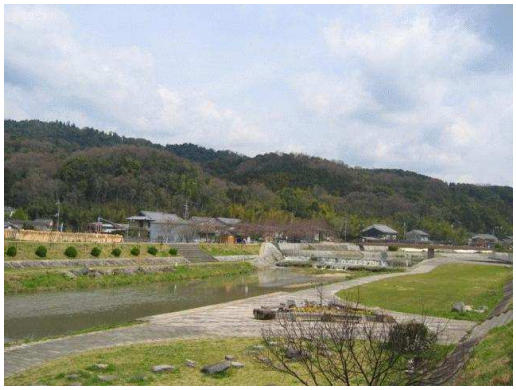
まず、初瀬川を探して、その北岸三輪山南麓の産鉄地名のある金屋集落へ行って、そのまま山裾を北へ大神神社へ。そして三輪山へ登拝して　山辺の道をそのまま北へ卑弥呼の墓といわれる箸墓へ
ぼかぼかの春の日差しにゆっくりと東へ山の方向へ歩き出す。

さすが　桜井は吉野杉の集散地。
桜井の駅の直ぐ近くに最近ではほとんど見られなくなった大きな貯木場がある。この横を抜けるともう市街地を外れ、菜の花の向こうに傾斜の緩やかなピラミッド型の三輪山が見え、田舎ののどかな風景がひろがっている。

桜井市市街を抜けたところから　三輪山

三輪山を眺めながら田圃のあぜを横切っていくと三輪山の山裾を流れる川岸に着き、歴史街道「金屋」の標識。
「やまと」の枕詞「しきしま(磯城嶋)」　初期大和政権の王城の地である。
この川が大和盆地を縦断して大阪湾にそぐ大和川の中流　初瀬川。
古代には大阪難波からこの三輪山麓まで遡る舟運の終着地。都の外港しとしても大いにさかえたところ。　また、ここからは陸路となり、　長谷・伊勢詣の宿場としも栄えた。

この東西に流れる初瀬川とクロスして　三輪山の山麓を通って石上へ古代王城の地を貫く山辺の道がつづく。
橋からは東の山々の間からまつ直ぐ流れ下る大和川が良く見え今も交通の要衝である。


初瀬川　三輪山南麓　金屋付近

初瀬川から東の長谷渓谷への街道筋

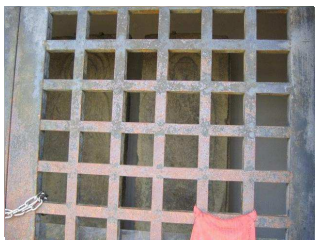
1.1.　産鉄地名の桜井市金屋集落　そこは古代王城の地「しきしま」

６世紀　欽明天皇磯城嶋金刺宮　仏教伝来の地ならびに７世紀栄えた都の外港「海拓榴市」

この一帯は「やまと」の「まくらことば」である「しきしま」(磯城嶋)の地。
川の南側に６世紀欽明天皇の磯城嶋金刺宮が造営され、欽明天皇の十三年（５５２）に百済の聖明王から釈迦仏の金銅像一躯と経論若干巻とがもたらされ、仏教が公式に日本に伝来した仏教伝来の地でもある。

金屋集落へ入る橋のたもとに仏教伝来の地の碑が建っている。
また　この川岸周辺は「「海拓榴市」と呼ばれ、交易の中心で７世紀には「藤原京」の外港として遣隋使もここから旅立ったという。
また　さらにその後　平安時代には「伊勢詣」「長谷詣」の宿場町として随分栄えたという。
今は全く静かな山裾の集落。ここで初瀬川に沿った東西の街道筋と北へ三輪山に沿って続く山辺の道が交わり、道の両側に落ち着いた家並みが続いている。

この古い家並みに沿って金屋の集落を三輪山の山裾を北へ細い山辺の道が続き、金屋の石仏や崇神天皇の磯城瑞離宮跡が山裾の林の中にひっそりと残っている。

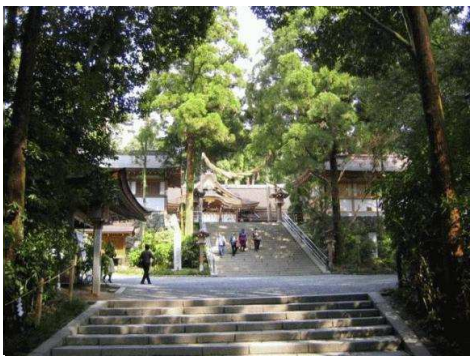


金屋の石仏　　2004.3.23.

崇神天皇の磯城瑞離宮跡　2004.3.23.

鉄滓が出たと文献のある金屋遺跡を探して、ひっそりと静まりかえった山裾の金屋集落を北へ向う。
幾度となく集落の人に聞くが、全くわからぬ。
金屋の名が示すとおり鉄の痕跡がないかちょろちょろ流れる小川を見たり、山間の細い谷筋を覗いたりであるが、まったく判らず、３０分ほどで金屋の集落を抜け、大神神社のある三輪の集落に入った。
午後　桜井市の埋蔵文化財センターを訪ね金屋遺跡について尋ねると
「 古老の話として、集落のあちこちで鉄滓が出たとの話がある。また中世鋳物師があり、
その滓もあり、 古代の鉄滓・鍛冶滓の真偽はよくわからない。 」
との事であった。
この三輪山の周辺で本当に古代の史実どうりに鉄の痕跡が見つかるだろうか・・・不安になってくる。

1.2.　三輪山をご神体とする日本最古の神社　大神神社



日本最古の神社　三輪山をご神体　大物主命を祭神とする大神神社(三輪明神)

三輪山の山裾を縫って北へたどると山裾の林の中から不意に大神神社の鳥居の前にでる。西の街の中心部に

ある大鳥居からまっすぐ三輪山へ続く参道と直角にここで出会う。
ここでは、もう三輪山に近すぎるほど近づいているので、ご神体の三輪山の全貌はもう見えない。
鳥居からまっすぐ大樹の林の中を拝殿に向って参道が続き、階段をあがったところに立派な拝殿がある。
三輪山が神体山であるので、社殿はない。

大神神社の有名な三ツ鳥居は拝殿の後ろにあり、ここからは見えない。この三つ鳥居は三輪山山中にあるみっの磐座を現し、大神神社が祭る３柱の神を示すという。

檜原神社　三つ鳥居

大神神社より、北側へ山裾を回ったところにある大神神社の摂社檜原神社も三輪山がご神体で社殿はなく、三つ鳥居が正面にあり、この三つ鳥居を通して三輪山に参拝する。
この三つ鳥居は三輪を代表する三輪そうめんの商標にもなっている。

大神神社から摂社狭井神社への道

大神神社からさらに北へ林の中の参道を 10 分ちょっと歩くと森の中に大神神社の摂社狭井神社がある。　三輪山への登拝の為にはこの狭井神社で許可願いをせねばならない。

大神神社の摂社　狭井神社

1.3.　三輪山　登拝　　三輪山に鉄の痕跡を探して

北　箸中より

三輪　正面より

南　金屋より

正午少し前に狭井神社で白いたすき
授け、神域なので飲食・写真撮影禁止　途中にある磐座でお参りすることなどの注意を受けて、拝殿の直ぐ横の登拝口より、三輪山へ登り出す。
三輪山にはそれぞれが大神神社の神々と同一視され、化身と言われる三つの磐座がある。
麓の辺津磐座・少彦名命　中腹の中津磐座・大己貴命　頂上の奥津磐座・大物主命の三つである。大神神社の三つ鳥居もこの三輪山の三磐座に起因すると言われる。麓の辺津磐座・少彦名命　中腹の中津磐座・大己貴命　頂上の奥津磐座・大物主命である。

大神神社大鳥居

ゆっくり歩いて登り約 1.5 時間弱　帰り 1 時間弱の道のり。
よく整備された登拝路が原生林の中についている。平日でもあり、全く人影なし。狭い小さな谷がまっすぐ上に向っている。小さなせせらぎがチョロチョロと音を立て心地よい。
神域の原生林の中、視界は開けないが、気持ちよい小道が続いている。
横の小さなせせらぎを見ると階段状の溜まりの中にきらきら光る小さな小片が散らばっていて、底には多くはないが、黒い堆積がある。
きらきら光るのは雲母　黒い堆積は砂鉄である。
上部へ続くせせらぎの中にづっとある。
以前東北岩手の砂鉄川で見た雲母と砂鉄の組み合わせがこの三輪山にも存在する。

狭井神社からの三輪山登拝口

30 分ちょっとで　中腹の滝のところにきて、ここから細い谷と別れ、山腹をまっすぐ上に登ってゆく。
視界は開けず、林の中。急斜面と言うわけではないが、上へ上へと良く整備された道が続いている。
道がひだまりに出るときらきら雲母が輝いて美しい。また　この道の上にも階段状になった所々に黒い砂鉄が堆積している。雨水の通り道として、この登拝路に流れ出て、堆積しているのだろう。
幾度となく砂鉄を産する山に入った事があるが、注意してこなかった精もあるが、これほど砂鉄が山道にあるところはない。やっはり　鉄の山である。　神域で写真が取れないのが残念。
注連飾りの付けられた磐座の横を通ってさらに上へ登っていく。
所々木々の間から大和盆地が垣間見え、金剛・葛城の山をバックに平坦地の中に大和三山が見える。
低い山とはいえ随分登ってきた事が判る。相変わらずつづら折れでない登りの道が続き、「もう空も近いのに頂上の尾根に出ないなあ」と思っていて、ふっと気がついた。この山は稜線のないピラミッド型　上り詰めた所が頂上。

約１．５時間ほどでまわりの樹木で視界は開けないが平坦な広場状の社のある頂上部に到達。三輪山頂に鎮座する大神神社摂社高宮神社で大物主神の子･日向御子神を祀る。後ろ両側には１本づつ天に向ってまっすぐ伸び、神聖な場所を演出している。視界は開けないが、気持ちのよい場所である。
さらに少し奥に進むと磐座がありここで道は行き止まりとなっている。大物主命の化身と言われる奥津磐座である。磐座の前に立ち手を合わせる。
２００年も昔　幾多の産鉄の人達がここに立ち、鉄の自立を願って儀式をしたに違いない。
この山の下で繰り広げられてきた日本誕生の歴史をあれこれひとり思い浮かべてました。
神域であるので、もっと宗教臭いと思っていましたが、たすきをかけていること以外特にそれもなし。
平日でお参りする信者に出会わなかったからかもしれないが・・・・・・
２０分ほど頂上にいてもときた道を引き返す。
登拝路は神域の中にあり、写真を取れませんでしたが、狭井神社の直ぐ北、三輪山の谷筋から流れ下る狭井川でも川底に光る雲母と砂鉄の堆積を見つけました。

三輪山から流れ出る狭井川の川底に堆積する砂鉄　　2004.3.23.　狭井神社の直ぐ北で

どこに鉄の鉱脈があるのか判らないが、黒い砂鉄が散らばり、差鉄の有る所にきらきらと雲母が光る。
三輪山は鉄の山であることに納得した登拝でした。
また、三輪の街中に立つチャコール色の落ち着いた大鳥居　その下に立ってビックリ。
耐候性鋼板を使った無塗装の鋼鉄製。
建設後約２０年を経て素晴らしい色でそびえ、鉄の神　三輪山の前景を作っている。
意図されたのではないだろうが、古代からの鉄の神に現代の鉄のモニュメントである。

完成　昭和 61 年 5 月 28 日
高さ 32.2m　柱間 23.0m 柱径 3.0m 笠木長 40.8m
本体総重量　18 トン
材質　耐候性鋼板
　　表面に錆層が形成され、無塗装で
　　塗装の役をなし腐食を防止する
耐久性　1300 年
基　礎 10x7x4m の鉄筋コンクリートを打ち、
　　その下 24m まで 1.1m φの鉄筋コンクリート杭
　　４本が打たれている。
　　大神神社　大鳥居　銘板より

耐用年数　1300 年の銘板のある現代の鉄のモニュメント　大神神社　大鳥居

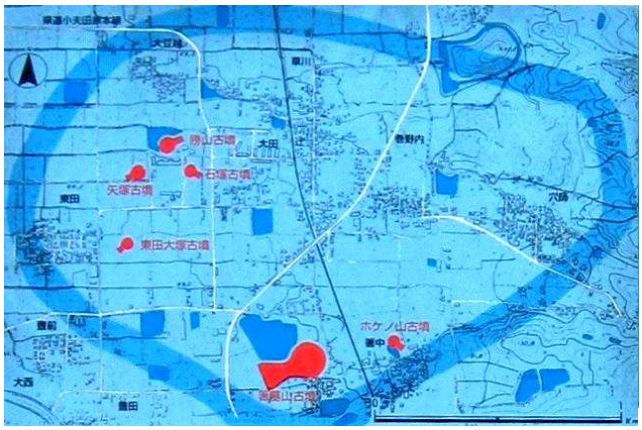
３０分ちょっとで麓に下りて、三輪の特産　三輪そうめんと柿葉すしで遅い昼食。
再度　大鳥居の前から三輪山の山麓を北の箸墓古墳への道をたどる。

1.4.　卑弥呼の地　箸墓界隈　三輪山麓の丘より夕日の大和盆地を眺める

三輪山の北に位置する巻向地区には 3 世紀に遡れるといわれる纏向古墳群がある。卑弥呼の時代まで遡れるといわれ、ここが畿内説の邪馬台国の地であり、箸墓古墳などの纏向古墳群のいずれかが卑弥呼の墓という人もいる。また　この巻向地区の山側　三輪山に隣接した山麓穴師には初期大和政権（三輪王朝）の創始者崇神天皇陵や景行天皇陵がある。この三輪山に隣接する穴師も産鉄地名であり、またさらに北の石上には、古代 5 世紀には物部氏の大きな鍛冶工房があった。

三輪山山麓から北に続く山裾の一帯は卑弥呼の時代から続く産鉄の地。

卑弥呼も初期大和政権（三輪王朝）も鉄を求めてこの地を支配し、鉄の力をバックに巨大化していったと考えるのも嘘ではなく思えてくる。確証はないが・・・。



箸墓古墳の傍にある纏向古墳群の標識

そんなロマンを考えながら、三輪山を眺めながら　大鳥居から北の森へ向って歩き出した。

三輪山をながめながらののどかな田園風景が広がる。

20 分程で大きな森に隣接した箸中の集落に入る。

大きな森でこれが箸墓とは気付かなかったが、この森の端に沿って集落をぬけると大きな池がこの森を取り囲み、ここが箸墓と知る。本当に馬鹿でかい。

ここから東へ箸中の集落を直角に曲がって北へ向う。

桜井線を北に渡ったところで丸い頂を見せるよく整備されたホケノ山古墳に行き着いた。

箸墓古墳の東端　箸中集落

箸墓古墳

箸墓古墳から東へ　山裾へ

ホケノヤマ古墳

箸墓古墳　ホケノヤマ古墳頂上より

ホケヤマ古墳は良く整備された公園になっていて、その頂上からは　直ぐ傍の箸墓古墳の大きな森が見え、その向こうには大和盆地が遠望される。
北側に眼をやると平野部には巻向古墳群の古墳と思われる森が点々と散らばっている。

また　東北の三輪山麓　穴師と思われるあたりにも幾つかの森がまじかにあり、三輪王朝の崇神天皇陵や景行天皇陵などであろう。
本当にまじかに日本誕生にかかわった古代の歴史が足下に広がっている。
しかも、あまり気にとめていなかった古代産鉄の地がその本拠である。

卑弥呼の時代からの「鉄の重要性」にビックリする。「卑弥呼の邪馬台国が鉄をバックに大きくなってきたのでないか。。。。。」と考えるなど今まで思いも寄らぬ事　鉄の山三輪山のロマンにしたりながら　陰影を増す大和盆地を眺めていました。

ホケヤマ古墳から桜井に戻る事にし、一番三輪山山裾に沿って続く山辺の道へ戻り、眼下に広がる夕暮れの大和盆地の景色や山裾の田園風景を楽しみながら三輪へ戻ってきました。

三輪山山麓　山辺の道　箸中付近より　大和盆地　　2004.3.23.夕

遠く大和盆地の西の端には二上山から葛城・金剛の峰のシルエットが浮かび、その前には大和三山が優美な姿を見せている大和盆地がひろがり、直ぐ前には箸墓古墳の森。この大和平野の南東の端には三輪山の大鳥居が慄然と大和平野を見据えている。
「やまとはくにのまほろば」「しきしまのやまと」がゆったりと広がっている。

三輪山に行こうと思った当初は「古代産鉄の地に鉄の痕跡を訪ねよう」との軽い気分でしたが、「この地が卑弥呼の時代から日本誕生にかかわる初期大和政権の本拠地　そして古代を通じて難波津へ通ずる都の外港で遣隋使もこの地から出発した」など思いも寄らぬ事。
しかもそれがすべて三輪山を中心とした古代の産鉄の地で・・・・。

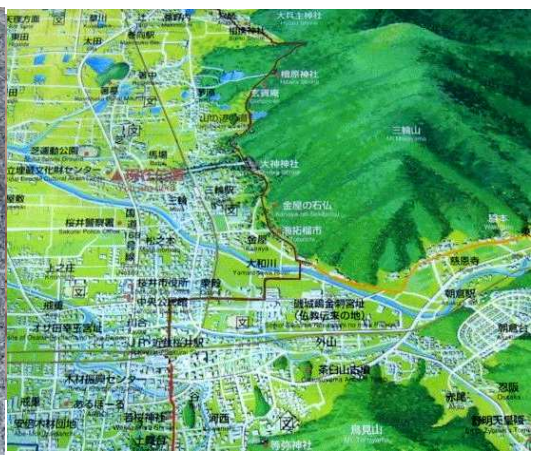
本当に卑弥呼の邪馬台国が鉄とかかわるこの地なのだろうか・・・卑弥呼の国と鉄とがかかわりをもっていると考えるなど本当にゾクゾクしてきます。
また、古代　畿内には三輪山・石上と同時に河内に大きな鍛冶工房。それが三輪王朝に続く河内の王権を・・・
そして北近江・越の鉄をバックに畿内へ入った継体天皇の誕生へ。

三輪山の登拝路には今もきらきら光る雲母の片と共に砂鉄が散らばる鉄の山。
「古代日本誕生はこの三輪山の鉄を求めてこの地を本拠にしたのではないか・・・・・」
現代も古代もやっぱり「産業・文化の米」鉄の持つエネルギーにただ感激。

そんな思いでみる眼下の大和平野の端に１３００年の耐用年数を持つという三輪山の鉄の大鳥居がリンと大和平野を見据えているのが、印象的。
三輪山へ登拝した満足感と思わぬ三輪山の鉄のロマンに浸りながら、桜井への道を急ぎました。

夕暮れの大和盆地をながめながら　桜井への山辺の道で

2004.3.23.　by M. Nakanishi



2.　『古代の鉄の山「三輪山」と初期大和政権』　思いつくままに

1. は古代鉄支配のシンボルでなかったか・・・・
2. 三輪山　大神神社　三輪山山麓は産鉄の地
3. 鉄をめぐる朝鮮半島諸国と日本の関係
4. 邪馬台国大和説と三輪山山麓　山辺の道

1.　三輪山は古代鉄支配のシンボルでなかったか・・・・

青垣山に囲まれ、巻向川と初瀬川の水垣に区切られた奈良県桜井市「三輪山」の麓は日本誕生の黎明の時代古代大和の中心であり、４世紀初期大和政権成立の舞台であった。「やまと」の枕詞「しきしま」もこの地である。

この地の東の後背にピラミッド型の均整の取れた美しい姿でそそり立つのが三輪山。

麓にはこの三輪山をご神体とし､出雲の神｢大物主命」を祭神とする日本最古の神社大神神社がある。産鉄と関係深い出雲の神を祭る事で判るごとく、鉄を産する神秘の山でこの周辺は産鉄の地と考えられる。

大和朝廷の成立期　３世紀～６世紀　国内では自立製造できず､伽耶などの朝鮮半島からの輸入に頼ってきた「鉄」。この時代　朝鮮半島諸国も戦乱の中にあり、鉄の覇権をめぐって　日本国内はもとより、朝鮮半島でも揺れ動く。

日本には数多くの産鉄の民が渡来し、力の源泉「鉄の自立」・鉄の覇権を求めた和鉄黎明の時代でもある。

大和政権をも含め日本各地の諸国・豪族が輸入鉄原料による鉄鍛冶による武器・工具製作を勧める一方、産鉄地を手に入れ、品質は輸入品には劣るものの和鉄製造に乗り出し巨大化してゆく。

畿内では　大和政権の各氏族がこの大和・三輪山山麓そして河内などで　そして吉備・美作・丹後・北近江・越の諸国が産鉄を背景に大和政権と連合・対抗してゆく。

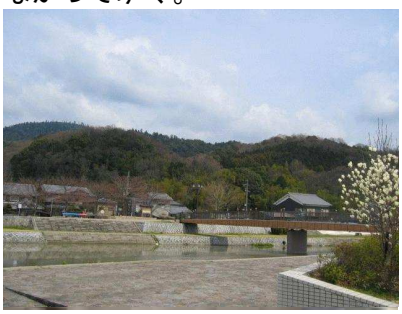
三輪山はそんな鉄支配のシンボル　大和政権にとっても放せぬ産鉄の地でなかつたか・・・・

卑弥呼の邪馬台国は三輪山の北　箸墓古墳などの纏向古墳群の一帯との説が大和存在説で有力であり、

４世紀三輪王権と呼ばれる前飛鳥初期大和政権(崇神・垂任・景行・成務・仲哀)の中心地である。

5 世紀には王城の地は河内の産鉄地に移るものの近江・

越の産鉄地をバックに王権に付いた継体天皇が大和に入り、6 世紀半ば欽明天皇はこの三輪山南麓の金屋に都磯城嶋金刺宮を造営。仏教がこの地に伝来すると共に次の聖徳太子の時代　大和朝廷の安定成長時代へとつながってゆく。



日本誕生の黎明の時期　大和政権の黎明を支えたこれら三輪山の麓には北から南に古代の道　山辺の道が山麓を縫って走り、今も金屋や穴師

出雲などの産鉄地名が産鉄の痕跡をとどめ、数々の古代遺跡が横たわっている。「やまと」の枕詞「しきしま」の地であり、三世紀後半から四世紀初頭の崇神天皇の都磯城端離宮や 6 世紀半にば欽明天皇の磯城嶋金刺宮などが谷から流れ出るこの地は難波津から大和川を長く都の外港の役割を果たす。

営まれた。また初瀬川が長谷渓遡ってきた舟運の終着地として欽明天皇の十三年（５５２）に　は百済の聖明王から釈迦仏の金銅像一躯と経論若干巻とが我が国にもたらされ、仏教が公式に日本に伝来した仏教伝来の地でもある。

2.　三輪山　大神神社　三輪山山麓 は 産鉄の地

三輪山をご神体とし、大物主命を祭神とする大神神社は産鉄と関係深い出雲氏の神社であり、いまも山麓に出雲の地名をとどめている。この出雲氏の居地に割り込む形で営まれるのが崇神天皇の磯城瑞離宮である。また、三輪山の北　石上には崇神天皇に重用され、

次第に勢力を伸ばし朝廷の軍事・武器を支配した物部氏の本拠がある。当時　有数の鍛冶工房があり、鉄支配の本拠地だったのだろう。

弥生後期　倭と朝鮮半島の鉄を巡る交流

三輪山と物部氏の関係についてはよく知らないが、物部氏と大物主神との関係からすれば、物部氏も出雲氏の系譜と考えられなくもない。

当時　鉄は朝鮮半島の輸入に頼っており、力の根源として　鉄の支配(鉄加工原材料の輸入・鍛冶加工)と共に、国内での自立製造に必死になっていた時代であり、製鉄原料が探され、製鉄技術者である渡来人を中心に幾多の製鉄が試みられたに違いない。

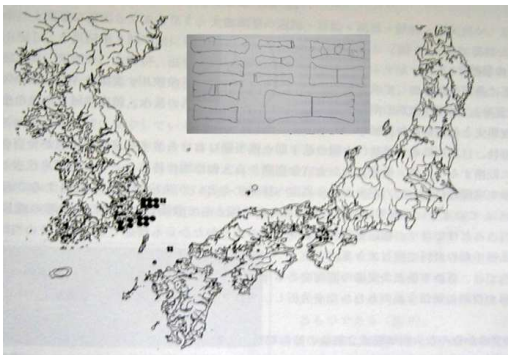
そんな中で　鉄を産する三輪山はそれら産鉄に携わる人達　鉄支配のシンボルとしてさん然と輝いていていたのではないだろうか・・・・・

3.　鉄をめぐる朝鮮半島諸国と日本の関係

この４世紀～７世紀半ばまで、朝鮮半島の三国時代　日本の古墳・前飛鳥の時代　朝鮮半島は戦乱の時代であった。

北には漢・魏の植民地があり、半島には高句麗が南への進出を狙い、百済・新羅そして小国の連合　伽耶が相互に競い合う激動の時代であった。特に伽耶は鉄の生産輸出国で日本はもとより周辺諸国もこの伽耶の鉄の輸入に頼っていた。この伽耶では　国力の小さな小国が群立しており、鉄資源・製鉄技術をめぐって常

に近隣諸国の侵略にさらされていた。そして、660 年に新羅が半島を統一する。
大和政権および日本各地の豪族も文化・技術の先進国であるこれら朝鮮半島の諸国と友好・同盟関係を結ぶと共に半島に派兵するなど深く朝鮮半島諸国とかかわり、活発な交流があった。



日本・韓国の鉄テイ分布 （４世紀後半）
供給源: 伽耶・新羅・百済

当時　朝鮮半島・日本地域での外交の中心はなんと行っても「鉄・鉄の技術」の入手と唐や隣国からの侵略への対処であったと考えられる。朝鮮派兵・任那など日本からの半島移住者・逆に日本各地への朝鮮半島からの渡来や朝鮮にルーツを持つ氏族の存在そして、百済・新羅・高句麗諸国との密接な関係はこんな情勢の中で生まれた。
５６２年に製鉄国「伽耶」が強大化した新羅に滅ぼされると、武器などの原材料「鉄」を伽耶からの輸入に頼っていた日本にとっては、鉄の入手経路の厳しい現実にさらされることになった。
つまり、この世紀　年々大陸からの鉄の入手は困難になり、鉄の大陸からの自立が大和朝廷にとっては最大の課題であり、伽耶の滅亡により、より一層の緊急課題となった。
日本には、朝鮮半島の混乱を逃れ、多くの渡来人が大陸からやって来て鉄の技術を日本に伝えたという。

大陸から輸入された鉄を原材料に、兵器や工具に加工する鉄鍛冶が専門職化して、軍事と結びつき、また、鉄の自立に向けた製鉄も始まっていたと考えられる。その起源は 6 世紀半ばと見られているが、まだ良く判っていない。
そんな　製鉄にかかわる渡来人の系譜が　豪族・氏族として　大和朝廷にも多数かかわっていたと考えられ、
現在においても各地に残る産鉄地名・氏名の中にはこの頃の産鉄に起源を持っているものもある。
出雲・息長・鴨・葛城・物部などの諸族　三輪山周辺に残る金屋・穴師・出雲・石上などの地名がこれにあたるのではないか・・・・

4.　邪馬台国大和説と三輪山山麓　山辺の道

邪馬台国大和説では、天理市から桜井市にかけて広がる纒向遺跡や大和（オオヤマト）古墳群が、邪馬台国の中心だったと考えられています。
最近、ホケノ山古墳が、築造年代３世紀前半にさかのぼることが発表され、箸墓古墳と並んで邪馬台国大和説との関係がいわれています。

◆　纒向古墳群

三輪山の麓にある桜井市の巻向地区には、卑弥呼の墓ではないかといわれている箸墓古墳を中心に多くの古墳や遺跡があり、近くの山辺の道には大和朝廷の実質的な創始者とも言われる、崇神天皇陵（行燈山古墳）や景行天皇陵（渋谷向山古墳）等もあり、ここが大和朝廷の発祥の地という人もいる。
纒向遺跡には２０数基の古墳が存在する。
このうち現状から前方後円墳と判別できるものとして、箸墓古墳、纒向石塚古墳・矢塚古墳・勝山古墳・東田大塚古墳・ホケノ山古墳がある。これらの古墳を総称して「纒向古墳群」という。

これら前方後円墳群は 3 世紀に現れ、4 世紀後半には消滅してゆく。
近年の橿原考古学研究所や桜井市教育委員会等々の発表によれば、纒向古墳群のなかの、勝山古墳、矢塚古墳、ホケノ山古墳、マバカ古墳などは出土物の調査等から、建造時期が３世紀半ばまで遡るとされ、これで卑弥呼活躍の時期と一致するという。
卑弥呼から大和朝廷へ　日本誕生にかかわる大和の連合王権の連合のシンボルがこの前方後円墳と唱える人もいる。

三輪山に行こうと思った当初は「古代産鉄の地に鉄の痕跡を訪ねよう」との軽い気分でしたが、
　「この地が卑弥呼の時代から日本誕生にかかわる初期大和政権の本拠地
　　そして古代を通じて難波津へ通ずる都の外港で遣隋使もこの地から出発した」
など思いも寄らぬ事。しかもそれがすべて三輪山を中心とした古代の産鉄の地で・・・・。

古代　畿内には三輪山・石上と同時に河内にも大きな鍛冶工房。それが三輪王朝に続く河内の王権へ・・・そして北近江・越の鉄をバックに畿内へ入った継体天皇の誕生へ。

三輪山は今も砂鉄が見られる鉄の山
この王城の地は時代を越えて脈々と鉄の系譜と共に続いている。

大神神社の巨大な大鳥居は耐用年数 1300 年の現代の鉄のモニュメント。これからもずっと三輪山の前に立って王城の地　やまとを見据え続けるという。
もうビックリ・・・。畿内の「鉄」が面白くなってきた一日でした。

2004.3.31.　by　M. Nakanishi

古代　初期大和政権(三輪王権)が王城の地に求めた産鉄の地

産鉄の地「三輪山」とその山麓を縫う山辺の道

1.　産鉄の地「三輪山」とその山麓を縫う山辺の道　Walk
   1. 産鉄地名の桜井市金屋集落 そこは古代王城の地「しきしま」
   2. 三輪山をご神体とする日本最古の神社　大神神社
   3. 三輪山　登拝　　三輪山に鉄の痕跡を探して
   4. 卑弥呼の地　箸墓界隈　三輪山麓の丘より夕日の大和盆地を眺める

2.『 古代の鉄の山「三輪山」と初期大和政権 』　思いつくままに
   1. 三輪山は古代鉄支配のシンボルでなかったか・・・・
   2. 三輪山　大神神社　三輪山山麓は産鉄の地
   3. 鉄をめぐる朝鮮半島諸国と日本の関係
   4. 邪馬台国大和説と三輪山山麓　山辺の道

【完】